旧多摩郡における三間社の歴史的性格について

A STUDY ON THE HISTORICAL CHARACTER OF “SANKEN-SYA” IN OLD TAMA COUNTY

白井 裕泰*

Hiroyasu SHIRAI

The results of analysis on the shrines that have living “sanken-sya” in old Tama county are as follows.

These shrines were the village shrine of the dominion that was ruled by powerful family as like Nishi-party, Yokoyama-party, and Chichibu-party in Kamakura era. And these powerful family built, repaired and conserved these shrines.

We think that the style of the main shrine as “sanken-sya-nagare-tsukuri” of these shrines was imitated the style of the main shrine of Tsuruoka-hachimangu shrine that was protected by Kamakura Shogunate, in the Middle Ages.

Keywords: *Old Tama county, “Sankenn-sya”, “Nagare-tsukuri” shrine, Large village in the Middle Ages, Village shrine, Seven parties in Musashi country*

旧多摩郡, 三間社, 流造本殿, 中世郷村, 鎮守, 武蔵七党

1. はじめに

多摩地方には、現在、谷保天満宮本殿（国立市、寛延2・1741年）、小野神社本殿（多摩市、昭和2・1927年）、百草八幡神社本殿（RC造、多摩市、昭和45・1970年）、元八王子八幡神社本殿（八王子市、18世紀前期）、二宮神社本殿（あきる野市、万治3・1660年）、雨武主神社本殿（あきる野市、嘉永2・1849年）、虎柏神社本殿（青梅市、享保19・1734年）、下山八幡神社本殿（青梅市、宝暦5・1755年）の8棟の三間社流造本殿が残っている^{注1)}。これら三間社流造本殿をもつ神社の由緒をみると、ほとんどの神社が古代または中世初期に創建された格式の高い神社であることがわかる^{注2)}。三間社流造の原形は、賀茂社によって古代まで由緒を遡ることができる¹⁾と考えられているが、本稿では、多摩地方における三間社のもつ歴史的な性格について考察を試みることを目的としている。

2. 多摩郡の三間社

『新編武蔵風土記稿』²⁾によれば、多摩郡において本殿が三間社以上の規模をもつと考えられる神社は、表1の15社をあげることができる。

これらの神社について現地調査を行ったところ、「七間半に三間余」とある大国魂神社本殿（府中市）は九間社流造であり、「二間二四間」とある布多天神社本殿（調布市）、「三間二一間半」とある別府神社本殿（日野市）、「二間二三間」とある宝樹寺稲荷神社本殿（八王子市）、「二間二三間」とある御嶽神社本殿（八王子市）、「三間二二間」とある子生神社本殿（あきる野市）、「二間二三間」とある高明神社本殿（あきる野市）、「五間四方」とある井草八幡神社本殿（杉

並区）は、いずれも一間社流造であった。上記に表現された規模は、大国魂神社本殿を除いて、本殿覆屋の規模であることがわかった。

したがって『新編武蔵風土記稿』における多摩郡の三間社は、表2にあげた8社の神社本殿に限定されることになる。

表1 『新編武蔵風土記稿』多摩郡における三間規模の本殿をもつ神社

No.	領	庄・郷	村	神社名	現在名	本社規模
1	府中領	分倍庄・栗原郷	上谷保村	天満宮	谷保天満宮	二間二三間
2		補陀郷	上布田宿	布多天神社	布多天神社	二間二四間
3		土淵庄・徳常郷	一之宮村	一之宮明神社	小野神社	三間二二間
4	日野領	土淵庄・徳常郷	百草村	八幡社	八幡神社	三間二三尺五寸
5			宮村	別府権現社	別府神社	三間二一間半
6	柚木領		横町	宝樹寺稲荷社	稲荷神社	二間二三間
7	由井領	横河郷	元八王子村	八幡社	八幡神社	二間二三間
8		谷地庄	本丹木村	蔵王権現社	御嶽神社	二間二三間
9		橋庄・秋留郷	二ノ宮村	二宮明神社	二宮神社	三間四方
10	小宮領	秋留郷	雨間村	雨武主明神社	雨武主神社	二間二三間
11		高倉庄・秋留郷	小中野村	子安明神社	子生神社	三間二二間
12		立田庄・秋留郷	乙津村	熊野社	高明神社	二間二三間
13	三田領	仙保・氷川郷	下村	八幡社	下山八幡神社	二間二一間半
14		仙保庄・「小曾木郷」	根布村	諏訪明神社	虎柏神社	三間二一間
15	野方領	「中野郷」	上井草村	八幡社	井草八幡宮	五間四方

表2 旧多摩郡における現存する三間社本殿

No.	神社名	現住所	本殿の構造形式	建築年代
1	谷保天満宮	国立市谷保	三間社・流造・銅板葺	寛延2年(1741)
3	小野神社 ¹⁾	多摩市一ノ宮	三間社・流造・銅板葺	昭和2年(1927)
4	百草八幡神社 ²⁾	日野市百草	三間社・流造・銅板葺・RC造	昭和45年(1970)
7	元八王子八幡神社	八王子市元八王子町	三間社・流造・銅板葺	18世紀前期
9	二宮神社 ³⁾	あきる野市二宮	三間社・流造・銅板葺	享保4年(1719)改修
10	雨武主神社	あきる野市雨間	三間社・流造・瓦葺板葺	嘉永2年(1849)
13	下山八幡神社	青梅市梅郷	三間社・流造・銅板葺	宝暦5年(1755)
14	虎柏神社	青梅市根ヶ布	三間社・切妻造・麦葺	享保19年(1734)

表注1) 小野神社本殿は、大正15年(1926)の一ノ宮大火により焼失した本殿を、昭和2年(1927)に再建したものであるが、「郷社一之宮之図」によると、旧本殿も三間社・流造・段板葺きであったことがわかる。

表注2) 百草八幡神社本殿は、昭和45年(1970)9月に新築されたものであるが、『新編武蔵風土記稿』によると、旧本殿は「本社は三間に三尺五寸にて、五間四方の上屋あり」と記され、身舎梁行が3.5尺であることから、小規模な三間社であったことがわかる。

表注3) 二宮神社本殿の建築年代は、棟札によると、享保4年(1719)と考えられるが、様式から判断すれば、万治3年(1660)に建築され、元禄元年(1688)に向拝部分を修理し、享保4年に大規模な修理を行ったと考えられる。

* ものつくり大学技能工芸学部建設技能工芸学科 教授・工博

Prof., Dept. of Building Technologists, Faculty of Technologists, Institute of Technologists, Dr. Eng.

そこで旧多摩郡における三間社流造本殿をもつ8神社の由緒について詳細にみることにする^{注3)}。

1) 谷保天満宮³⁾

昌泰4年(901)右大臣菅原道真が筑紫太宰府に左降の際、第三子道武は武蔵国多摩郡分倍庄栗原郷に配流された。延喜3年(903)父君薨去の報に、道武は思慕の情から父君の尊容を刻み、鎮座したのが谷保天満宮の起りとされている。天曆元年(947)京都北野天満宮造営の際、当社の威霊を奉上され、村上天皇の勅により神殿が造営された。

養和元年(1181)11月3日旧来の地(現国立府中インター付近)より神殿を現在の地に遷し、大宰府に模して梅香山安楽寺を興し、社務六院を置き、祀典を司った。建治元年(1225)後宇多天皇の勅により、藤原経朝書「天満宮」の扁額(重要文化財)が納められた。

天正19年(1591)徳川家康より社領13石5斗が寄進された。

明治6年(1873)村社、同14年(1881)郷社、同18(1885)年県社、同26年(1893)府社に昇格し、東日本の天満宮としては最も古く、湯島天神・亀戸天神とならび、関東三天神と称される。

図1 谷保天満宮本殿(国立市 寛延2・1741年)

2) 小野神社⁴⁾

社伝によれば、当社は安寧天皇の御宇に鎮座して、祭神は当国の国造恵多毛比命の祖天下春命であり、後に瀬織津比咩命、倉稻魂命を合祭して、三神一社三扉とした。

一ノ宮村の小野神社は、武蔵府中の六所宮(大国魂神社)に合祀された武蔵国内の主要な六神社の一つで、しかもその第1位たる一ノ宮として、古代以来府中六所宮とは深い関係にあった。

建久4年(1193)の銘を刻した経筒をみると「一宮別当松連寺」と記してある。中世において松連寺が当社の別当職であったことは明らかである。また後北条氏、太田道灌らの崇敬を受けて栄えた。

慶安元年(1648)、徳川家光が天下安穩、国土泰平の祈願として、御朱印15石の社領を寄進した。

明治6年(1873)郷社に列した。

図2 郷社一之宮之図(明治10年代/太田伊三郎氏所蔵)

3) 百草八幡神社⁵⁾

社伝によると、当社は聖武天皇の御宇、天平年中(729-748)釋の道璿の高弟道廣という僧が創立し、康平5年(1062)源頼義が奥州征伐の際、この地をよぎり、再建したといわれる。建久3年(1192)には源頼朝が武運長久を祈願し、太刀一振りの奉納があった。

奉安殿に安置されている金銅阿弥陀如来坐像(重要文化財)は、建長2年(1250)施主源氏某より源家の祈祷所であった当所真慈悲寺に寄進され、同寺廃亡後は百草八幡宮の本地仏となっていた。

江戸時代に松連寺や松連寺が別当寺として管轄していた百草八幡宮の立地している所は、中世の真慈悲寺の寺地に比定され、ここが多西郡吉富郷内であったと推定される。

明治6年(1873)に村社に列せられた。

図3 百草八幡神社(『新編武蔵風土記稿』より)

4) 元八王子八幡神社⁶⁾

康平6年(1063)源頼義が鎌倉由比郷鶴ヶ丘に京都岩清水八幡宮の神を奉祀し、その後治承4年(1180)源頼朝が大庭景義に命じて、これを小林郷松ヶ岡(現在の鶴ヶ岡)に遷した。建久2年(1192)宮殿の造営が終わり、正遷座の際、古神体を頼朝の家臣梶原平三景時に賜った。当社のあるこの地は、景時の所領であったので、鶴ヶ岡に似た場所を選び、同年6月奉祀した。

その後、文明・寛正の頃、傷んだ社殿を修理し、また元亀3年(1572)北条氏照が、当地に八王子城を築いて居住し、社領を賜った。

天正19年(1591)徳川家康より御朱印10石の社領を寄進された。

明治6年(1873)には郷社に列せられた。

図4 元八王子八幡神社本殿（八王子市、18世紀前期）

5) 二宮神社⁷⁾

明治初めまでは小河大明神または二宮大明神とも称されていた。小河大明神とはその鎮座地が『和名抄』に記載の武蔵国多摩郡小河郷の地区内にあったためであり、二宮大明神とは『神道集』または『私案抄』等にみられる武蔵総社六所宮所祭神座の第二席にあるためである。

朱雀天皇の御代、藤原秀郷は自分の生国近江国山王二十一神中の二宮を特に崇敬しており、天慶の乱に際して、平将門討伐のための関東出陣の際、当地に戦勝祈願をし、乱平定後報賽として社殿玉垣を造営し、社領百町を寄進した。

建久年間(1190-98)、源頼朝より社領 1000 石の寄進があり、天正元年(1573)北条氏政より社領 500 石を寄進され、その年陸奥守氏照は当社を祈願所と定め、尊崇をよせた。

天正 19 年(1591)徳川家康より御朱印 15 石の寄進があった。

明治 3 年(1870)二宮神社と改称し、明治 6 年(1873)村社に列せられた。また昭和 17 年(1942)郷社に昇格した。

図5 二宮神社（あきる野市、万治3・1660年）

6) 雨武主神社⁸⁾

口碑によれば、天正年間(1573-93)北条氏直の家臣石川土佐守所領のとき、社領若干を差し置かれた。

旧社の位置は、明神山麓にあり、寛永 16 年(1639)再建されたが、弘化 3 年(1846)から嘉永 2 年(1849)にかけて、386 代飛騨匠後藤三次郎が総擲造り、四面に精巧なる彫刻を施して建造し、明治 42 年(1909) 9 月現在の地に遷座し、覆舎を新築し、従来の覆舎は改造して拝殿とした。

旧来雨間および高月村切欠の鎮守であったが、明治維新の際、切欠は氏子を離れ、ただ信徒として永久崇拝することになった。明治 2 年(1869)10 月社号を雨武主大明神から雨武主神社に改め、明治 6 年(1873)に村社に列した。

図6 雨武主神社本殿（あきる野市 弘化3・1846年）

7) 下山八幡神社⁹⁾

明細帳（宝暦 5・1755 年）によると、下山八幡神社の創立は長久 2 年(1041)と伝える。また神社には弘安 4 年(1281)の墨書銘がある木彫神鳩が所蔵され、歴史の古さを物語っている。

天正 19 年(1591)御朱印地 5 石が徳川家康より寄進される。吉田家許状(正保 3・1646 年)に、「武州多摩郡下山村八幡宮」、『新編武蔵風土記稿』に「八幡社」とある。

明治維新に八幡神社と改められ、明治 6 年(1873)村社に列した。

図7 下山八幡神社本殿（青梅市 宝暦5・1755年）

8) 虎柏神社¹⁰⁾

当社は延喜式神名帳所載の多摩郡八座の一つである虎柏神社の論社である。

永正年間(1504-21)勝沼城主三田氏家により再興される(『西多摩郡霞村社寺明細帳』明治34年)。天正18年(1590)浅野長政が諏訪神を正殿、虎柏神を東の相殿、疫神を西の相殿に祀ったため、諏訪明神と呼ばれるようになった。その諏訪神は天慶3年(940)源經基の勧請といわれるが、一説には、旧別当である高峰山天寧寺の開山一華文英(永正6・1509年没)が故国信州の諏訪明神を勧請したものとされる(山田早苗『玉川浜源日記』天保13年)。

享保12年(1727)に記された縁起によると、小曾木郷の総社とされ、天正19年(1591)には徳川家康より御朱印地3石を寄進された。

明治3年(1870)それまで脇殿に祀られていた虎柏神を正殿に遷し、諏訪神を東の相殿として、虎柏神社の旧称に復した。同6年(1873)郷社に列する。

図8 虎柏神社本殿(青梅市 享保19・1734年)

3. 三間社と社格

3-1 社格について

明治4年(1871)の太政官布告により、全国の神社は内務省神社局の所管となり、官社(官幣社と国幣社)と諸社(府県郷村社)の社格に整備された。官社のうち神祇官に属するものは官幣社、地方官に属するものは国幣社に分けられ、制定時には合わせて97社あった。官幣社は、祈年祭・新嘗祭・例大祭の際に皇室からの幣帛料が共進され、国幣社には、祈年祭・新嘗祭では皇室から、例大祭は国庫から幣帛料が共進され、諸社の例大祭には府県市町村から幣帛料が共進された¹¹⁾。

ところで神社の社格はどのように決められたのであろうか。社格は明治4年(1871)にはじめて制定されたのではなく、制度的に整備されたのは、平安時代の『延喜式神名帳』に記載された式内社があり、あるいは江戸時代において、幕府は朱印状を付与することによってあらたなる格付を試みたと考えられることができる。

3-1.1 式内社について

延喜5年(905)醍醐天皇は新たに式を編纂するよう詔命を下した。式というのは、朝廷の諸官司がそれぞれ遵守すべきいろいろの規則類をまとめたものである。延長5年(927)に編纂を終え、上申された

のが『延喜式』であり、平安初期に施行された『弘仁式』と『貞観式』とを併合改訂して成立したものであるとされている。

『延喜式巻九』をみると、当時の全国における大小神祇の名称が記されているが、一般に神名帳と称され、ここに記載された神社を式内社といっている。式内社が『弘仁式』や『貞観式』に記載されたことについて、多くの神社の中から選定された結果、神名帳に記載されたのであり、その選定理由は、これらの神社が他の多くの神社に比して由緒が古く、霊験も顕著であったと認められたからと考えられる。すなわち式内社の創建時期をみると、ほとんどが平安時代よりも古く、奈良時代あるいはそれ以前に遡ることができるといえよう¹²⁾。

武蔵国のうち式内社を最も多くもつ郡は多摩郡で、阿伎留神社・小野神社・布多天神社・大麻止乃豆乃天神社・阿豆佐味天神社・穴沢天神社・虎柏神社・青渭神社の八座が鎮座している。その理由として、多摩郡に国府(今の府中)が存したことをあげなければならない。国府の近いところに小野神社・大麻止乃豆乃天神社・穴沢神社・虎柏神社・青渭神社(ただし穴沢神社以外には論社がある)の5社があり、平安時代の初期に、中央の神祇官に対して官社として上申したのは当時の国司であったであろうことから、武蔵国司が、その近隣の神社を推薦しがちであったことは容易に想像される。

江戸時代末期になって、武蔵国の地誌類が多く出版されて郷土研究が盛んになり、また古神道の復興気運が旺盛となるに伴い、式内社の探求も盛んに行われるようになったが、式内社の所在地については、必ずしも明らかになっていないものがある。式内社の候補として論議される神社は論社といわれる。

多摩郡の式内社について2社以上の論社があるものとして、小野神社・大麻止乃豆乃天神社・虎柏神社・青渭神社があり、阿伎留神社・布多天神社・阿豆佐味天神社・穴沢天神社には論社がない^{注4)}。

小野神社の所在として、多摩川北岸の府中市住吉町と南岸にある多摩市一ノ宮の2説があり、大麻止乃豆乃天神社の所在として、稲城市大丸、青梅市御岳山の2説があり、虎柏神社の所在地として、調布市須佐町、青梅市根ヶ布の2説があり、青渭神社の所在地として、稲城市東長沼、調布市深大寺町、青梅市沢井の3説がある。

3-1.2 朱印地について

社寺は幕府から与えられた御朱印地をもつもの、領主から与えられた黒印地をもつもの、単に年貢だけを免除された除地をもつものなどさまざまである。特に朱印地は、年貢の免除、人夫の徴発、収入の自由な消費などいわゆる「守護不入」が認められていた¹³⁾が、そのような実質的な権益だけではなく、将軍より直接拝領した土地であるということで大きな権威をもち、社寺の格式序列化に重要な役割を果たしたと考えることができる。

江戸時代に幕府が付与した朱印状の石高は、直接的な社格の表現ではないが、幕府が宗教的な機能による農村支配を確立したことを考えれば、古代・中世を通じて神祇制度によって形成された社格を強く意識して決められたことは想像に難くない。すなわち、徳川家康は天正18年(1590)関東入国以来、新領地の経営にあたり、領国の経済的基盤である農村を支配するために、社寺に朱印状を付与して統制し、社寺を媒介に農村を支配下に治めるように構想したのであろう。

3-1.3 明治の社格制度

村の鎮守に参拝すると、「村社〇〇神社」という石碑をみかけることがある。これは戦後国家神道の廃止を主眼とする政教分離政策としての「神道と国家の分離」指令（昭和 20 年）により廃止された社格を示すものであり、今となっては、明治維新以来の国家神道の解体を象徴する記念碑であるといえよう。

国家神道は、幕末維新期の神道の興隆を背景に、神社神道と皇室神道を直結して形成された特異な民族宗教であった¹⁴⁾が、明治維新の神仏判然令に引き続き、明治 4 年(1871)の社寺領の上知命令、神社の社格制定、氏子調べ制度の新設などの措置によって、制度的に神道国教化が確立されていった。石碑に刻まれた「村社」は、明治 4 年(1871)の社格制定による神社の格付を示し、神社は官社（官幣社・国幣社）、府県社、郷社、村社および無格社というように五段階に序列化されたのであった。

明治 4 年(1871)の社格制定の意味は、従来の神社神道をヒエラルキー化することによって、明治国家の神祇省に統轄し、明治政府の精神的イデオロギーを形成することを目的としたものであった。すなわち、明治天皇を家長とし、神社神道を媒介に国民を家族化する構造、すなわち家族国家主義を形成したのであった。この構想のもとになったのは、天皇を中心とする中央集権国家であった古代国家における神祇制度に他ならない。

3-2 社格の基準

明治 4 年(1871)5 月 14 日、明治政府は、伊勢神宮を頂点にした社格を制定した。この社格制度における社格の基準はいかなるものであったのであろうか。

社格の基準を示唆する資料として、小野神社の「郷社願」（明治 12 年、太田伊三郎氏所蔵）がある。明治 13 年(1880)10 月、神奈川県から郷社・村社の辞令である「社格状」が配布され、小野神社は同年 10 月 30 日付けで、明治 6 年(1873)12 月に遡って郷社に指定された。「郷社願」の内容は以下のようであった。

郷社願

南八大区八小区
武蔵国多摩郡一宮村
小野神社

当社ノ義ハ先般神社明細帳ヲ以委詳上申仕候通」延喜式内本郡八座の内実蹟ニテ往古本宿村」内小野宮ニ鎮座有也処玉川水災ニ依テ社地流失」致シ当今之地ニ辻座相也候儀ニテ確平タル用社ニ」有之殊に当社ハ上世本郡式社ノ内ニモ別段御崇敬」ヲ以元慶八年七月神階ヲ授ラレ候儀歴史ニ」昭然ト相見ユ且中世国司ノ奏請ニ依テ国衙総社」ノ相殿ニモ分祭有之徳川氏ノ時ニ至リテモ寛文中」幕府ノ沙汰ヲ以神殿造営等有之候程ノ儀ニ」御座候処御維新以後今以社格之御沙汰無」之神官氏子一同心配罷在矣義ニ自何卒」社格之儀御社ニ御定被成下度只管連署ヲ」以此段奉懇願矣也

右村氏子

明治十二年九月
馬場源治郎
山田又三郎

小野神社が郷社の資格要件として、古代において式内社であったこと、中世において武蔵六所宮の内一宮であったこと、近世において徳川氏によって本殿が造営されたことなどがあげられている。

また同様に社格の基準を示唆する資料として二宮神社に「御社格昇進願書」（昭和 9・1934 年）がある。この願書は、二宮神社社掌河野清および氏子総代 5 名が、村社から郷社への昇格願を東京府知事香坂昌康に提出したものである。この願書が認められ、二宮神社は

昭和 17 年(1942)に郷社に昇格している。願書には「社格昇進請願理由書」が添付されていたが、その内容は以下のようである。

当社ハ往昔ヨリ小川大明神トモ又ニ宮大明神トモ称ス。小川大明神トハ其ノ鎮座地ガ和名抄ニ見ユル武蔵国多摩郡小川郷ニ属セシヲ以テナリ。又ニ宮大明神トハ神道集又ハ私案抄等ニ拠ル武蔵総社六所宮（今ノ官幣小社大國魂神社）社所祭神座ノ第二次ニ在ルガタメナリ。因ッテ其ノ地名ヲモニ宮村ト称ス。恰モ多摩郡小野郷ナルニ小野神社ガ武蔵総社六所宮所載新座ノ第一次ニ在ルガ故ニ一宮大明神トモ称シ又其ノ所在地ヲ一宮村ト称スルガ如シ。現在ハ二宮ト小川ハ共ニ東秋留村内ノ字名トナリテ僅ニ其ノ地名ヲ存スコノ地一帯ハ多摩川ト秋留川トノ川合ニ在リテ五日市鎌倉二通ズル街道ニ当リ頗ル枢要ノ地勢ヲ成シ特ニ神社ハ高台ニ属スルニ宮城跡ノ一端ト思ハルノ所ニ在リ。延喜式左右馬寮式ニ御牧武蔵国小川牧トアルハコノ小川郷ニアリシ馬牧ニシテ武蔵七党中西党ヨリ出デテ最モ著名ナリシ小川二宮両氏ノ居住地ナレバ当時ヨリ二宮城ハ存在セシガ如シ。延文ノ頃ヨリ大石氏ガ二宮城ニ居リシ事大石系図ニ見ユレド大石氏ノ祖ハ小川宗弘ノ長子弘真ヲ以テ始メトス。然バ本社ガ往昔ヨリ此等豪族ヨリ産土神トシテ世々崇敬セラレシコトハ疑ヒナキ所ヨリ古記録ニ拠ルニ藤原秀郷己ノ生国ナル近江国山王二十一社中ノ二宮ヲ尊崇セル縁故ヲ以テ特ニ当社ヲ尊崇シ天慶ノ乱ニ際シテ戦勝ノ祈願ヲ籠メラレ乱平ギテ報賽ノ為メ社殿ヲ再興セシコトヲ伝フレバ思フニ秀郷後ニ武蔵守トナルニ至リ山王二十一社ノ二宮ニ準ジテ其ノ祭神ニ国常立尊ヲ合祀シテ尊信セラレシナルベシ。此ノ地ニ今猶十数代継続シ来リシ神主家村野氏ヲ始メ往昔ヨリ豪族アリシ其ノ一族アリテ皆秀郷ノ後胤ナリト云フ。鎌倉大草子ニ文明ノ頃上杉氏が大石駿河守ノ居城ニ宮城ヲ改メシコトハ見エマタ大石家来ニ大石遠江守信重延文ノ始メニ二宮ニ居城セシコトヲ記ス。大石氏ハ後ニ北条氏の縁戚トナル。

右記録ニ拠レバ天正年中北条氏政社領五百石ヲ寄付セラレ共弟陸奥守氏照瀧山城ニ居リ当社ヲ祈願所トシテ尊敬シ社殿修復ノ事アリ。サレバ大石氏モ延文頃ヨリ二宮城ニ在リテ永ク当社ヲ尊崇セラレシコトハ想像セラルノ所ナリ。

回国雜記ニ道興法親王ガ大石信濃守ノ館ニ遊ビ遠景スグレテ数千里ノ江眼前ニツキストイハレテ詩ヲ作り多摩川ノ眺望ヲ歎賞セラレジハコノ二宮ニ在リシ円通寺ナリト伝フレドモ地勢ヨリ察スルニ大石氏ノ館ト称スルハ確ニ二宮神社ノ境域地付近ニ在リシコトハ今往々桑園トナリシ所ヨリ礎石ト思ボンキモノ又ハ古瓦等ノ数多出土スルコトアルノミナラズ境域ヲ圍リテ城濠アリシ遺跡ヲ存スルヲ以テモ知ラルベシ。

源頼朝モマタ社領千石ヲ寄付セシコトヲ伝フレドモ降テ徳川家康ニ至リ天正十九年御朱印地十五石ヲ寄付セラレ以来代々継承以テ万延元年マデニ至ル。

万治元禄年間ノ棟札其ノ他ノ旧記ニハ当時ノ氏子区域ハ二宮小川野辺ノ三ヶ村ノ如クナレドモ往昔小川大明神ト称セシ頃ハ即チ小川郷ノ氏神タリシコトハ疑ニナキ事ナリ。又寛永十七年奉納ノ鐘銘ニナル奉納者氏名中多摩川ヲ隔テタル福生熊川村民ノ氏名アリ。旧記ニヨレバ同村民ガ恒例臨時ノ神事ニ毎年奉仕シタルコト見ユ。特ニ熊川村三ノ鳥居アリシ遺跡ヲ存スルノミナラズ同村内神社ニ面スル便宜ノ地ニ選擇所を設ケテ多摩川洪水ニテ川上トナリタル際此所ニ於テ選擇ヲ行ヒ来リシガ後ニコレヲ礼拝明神ト称スルニ至リ遂ニ独立ノ神社トナリシモノ現ニ村社熊川神社是ナリ。

武蔵総社誌モ「当昔国内諸神ノ中ニ簡拔トテ国府ニモ殊ニ斎ヒ祀ラレ給フバカリノ大神ニ座シマサバ元来オボロケナラヌ大社ニテヤ座ケシ」トアル如ク武蔵総社六所ノ内ニテ一宮小野神社六宮杉山神社ノ本社ハ郷社ニテ三宮氷川神社五宮金鎖神社四宮秩父神社ノ本社ハ皆官国幣社ニ列セラレ独リ二宮神社ノミ村社ノ格ニ在ルハ頗ル遺憾トスル所ナリ。

以上要スルニ当社ハ往昔小河郷ニ於ケル氏神トシテ最モ著名ナ御社ニマシシカバ国府ノ総社六所ノ一座トシテ奉斎セラレ随テ武家豪族ノ崇敬モ篤ク特ニ徳川幕府ニ至リテ社領十五石ヲ寄進セラレシ事実ヨリ考察シ奉レバ現在ノ社格ハ村社ナレドモ郷社トシテ十分ノ資格アルモノト察セラレ茲ニ昇格請願ニ及ブ次第ナリ。

この願書には郷社としての資格の要件として、「小川郷ニ於ケル氏神」であったこと、「武蔵総社六所宮社ノ所祭神座ノ第二次ニ在ル」こと、「徳川幕府ニ至リテ社領十五石ヲ寄進セラレシ」ことをあげ、「武蔵総社六所ノ内ニテ一宮小野神社六宮杉山神社ノ本社ハ郷社ニテ三宮氷川神社五宮金鎖神社四宮秩父神社ノ本社ハ皆官国幣社ニ列セラレ独リ二宮神社ノミ村社ノ格ニ在る葉頗ル遺憾トスル所ナリ」と訴えているのである。

このように郷社の社格決定基準として①式内社または郷村の鎮守であること②武蔵総社六所宮社の一つであること③徳川幕府より朱印地を寄進されていることなどが挙げられる。すなわち神社のもつ歴史性こそが明治4年(1871)の社格制定の際に尊重され、格式の基準となったと考えられよう。特に国家神道形成の政治的意図とは、近代天皇制国家の構築のための宗教的機能による家族国家観（＝共同体意識）の形成であり、皇室神道を中心としたそれまでの伝統的神社神道の再編成であった。それゆえ明治政府は、明らかに古代天皇制国家が定めた『延喜式』の神祇制度による神社の序列化の再現を目標としたのであり、したがって社格制度において、古代の式内社が重んじられたことは当然の帰結であった。

3-3 三間社をもつ神社の社格

旧多摩郡において三間社をもつ神社の社格をまとめたものが表3である。この表をみると、三間社をもつ神社は、百草八幡神社および雨武主神社を除く6社が式内社、武蔵六所宮社または御朱印寄進社としての社格をもっていたことがわかる。

表3 旧多摩郡における三間社をもつ神社の社格

No.	神社名	式内社	武蔵六所宮御朱印状	社格
1	谷保天満宮		13石5斗(天正19年)	府社(明治26年)
3	小野神社	指定	15石(慶安3年)	郷社(明治6年)
4	百草八幡神社			村社(明治6年)
7	元八王子八幡神社		10石(天正19年)	郷社(明治6年)
9	二宮神社		15石(天正19年)	郷社(昭和17年)
10	雨武主神社			村社(明治6年)
13	下山八幡神社		5石(天正19年)	村社(明治6年)
14	虎柏神社	指定(論者有)	3石(天正19年)	郷社(明治6年)

この表をもとに三間社をもつ神社の社格について個別にみていくと以下のようなものである。

県社・府社に指定された谷保天満宮は、天暦元年(947)京都北野天満宮造営の際、当社の威霊が奉上されたこと、徳川家康により御朱印地13石5斗が寄進されたことが評価されたと考えられる。

郷社に指定された小野神社・二宮神社は、『延喜式神名帳』に式内社として格付けされ、武蔵府中の六所宮（大國魂神社）に合祀された武蔵国内の主要な六神社の一つであり、徳川幕府より御朱印地15石を寄進されたことが評価されたと考えられる。また郷社に指定された虎柏神社は、『延喜式神名帳』に式内社(論社)として格付けされ、徳川家康より御朱印地2石を寄進されていることが評価され、元八王子八幡神社は、梶原景時が源頼朝から鶴岡八幡宮の古神体を賜り、建久6年(1195)に創建されたこと、天正19年(1591)徳川家康より社領10石の御朱印地を寄進されたことが評価されたのであろう。

村社に指定された下山八幡神社は、長久2年(1042)に創立され、天正19年(1591)徳川家康より御朱印地5石が寄進されている。

ところで村社であった百草八幡神社は康平5年(1062)源頼義が奥州征伐の際、この地をよぎり、再建したといわれ、江戸時代は松連寺が別当寺として管理していたが、この地は中世において源家の祈禱所であった真慈悲寺の寺地に比定され、百草八幡宮は真慈悲寺の鎮守であったと考えられ、他の神社とは性格が異なる。同様に雨武主神社は、天正年間(1573-93)北条氏直の家臣石川土佐守所領のとき、社領若干の寄進があり、創建が中世末期に更に遡る可能性は乏しく、他の神社とは歴史的性格が異なるといえよう。

4. 中世郷村と神社

三間社のある神社をみると、旧府社に指定された神社として谷保天満宮、旧郷社として小野神社、元八王子八幡神社、二宮神社、虎柏神社、旧村社として下山八幡神社、百草八幡神社、雨武主神社がある。旧府社および旧郷社はその地域において歴史も古く有力な神社であることがわかる。ここでは旧多摩郡において三間社をもつ神社が中世においてどのような地域にあって、どのような人たちによって崇敬されていたかをみてみることにする¹⁵⁾。

ところで12世紀の大開墾の時代を通じ、地域社会では行政単位の再編がすすみ、中世に繋がる荘郷などの新たな所領単位が生まれていった¹⁵⁾。

多摩郡は、ほぼ多摩川を境として多西郡と多東郡とに分割され、多摩川を挟んで武蔵国府周辺の多西郡には、稲毛荘、小沢郷、吉富郷、土淵郷、得恒郷、小山田荘、船木田荘があり、多東郡には谷保郷、立河郷など中世的郷が生まれた。このうち谷保郷、立河郷、小沢郷、吉富郷、土淵郷、得恒郷は国衙領の郷であった。また小山田荘内には鎌倉街道が通るが、鎌倉幕府はその交通路を直轄領あるいは準直轄領(上杉氏領や鎌倉寺院領)として押えており、鎌倉から武蔵府中にいたる街道沿いの山内荘、小山田保、吉富郷はみな鎌倉幕府によって掌握されていた¹⁶⁾。

『新編武蔵風土記稿』によると、中世においては、谷保天満宮は谷保郷、小野神社・百草八幡神社は吉富郷、元八王子八幡神社は横河郷、二宮神社は小川郷、下山八幡神社は氷川郷、虎柏神社は小曾木郷にあった。

これまでの研究によると、西党または横山党・秩父党の武士団が鎌倉幕府の御家人として多摩川流域の開発を進めたことによって開発領主となり、その結果として多摩川流域の荘・郷を支配したことが明らかになった。

秩父氏は、平安末期までは葛西・豊島・河崎・渋谷・河越・江戸・畠山・小山田などの諸氏を分出し、重綱以来代々武蔵国留守所総検校職を相伝する国衙の有力在庁として勢力を誇っていた。この職は鎌倉時代においても秩父家家督が代々相伝するものと認識され、在庁官人を統轄する立場にあった。また国衙軍に編成された国内の党的武士団に対する軍事動員権も有していた。秩父重弘の三男有重が多摩郡小山田を名字の地とし、さらにその子孫が稲毛・小沢など国衙周辺地域に発展していったのも、秩父氏のこうした国衙における立場を背景としたものであったであろう¹⁷⁾。

西党日奉氏は、日ノ宮権現(日野宮神社)を中心として日野台地一帯に勢力を張った武士団である。西党の日奉氏の一族は、由木・川口・平山などの船木田荘内や高幡・田口・田村・土淵・上田など得恒郷や土淵郷周辺に分布し、船木田荘の開発、荘園化や在庁官人の地位を背景とした国衙領の開発などに関わったものと考えられる¹⁸⁾。

横山党は、小野氏系図によると、漢詩文にすぐれた文人として有名な小野篁に系譜を引く小野姓の同族武士団で、武蔵守隆泰の子義隆が横山に住み、横山大夫を称したのにはじまる¹⁹⁾。

横山氏が小野牧別当の系譜を引き、小野牧の経営・開発を通じて成長していった氏族であることはほぼ確実である。小野氏の一族は、小野郷・横山荘周辺を中心に武蔵全域、相模東部相模川沿いや甲斐国まで分布した。小野氏の本宗横山氏は、小野牧の開発をすすめてこれを荘園化し、時重・時広のころから権守として国衙在庁官人と

なつたとみられる。横山荘の多くは、船木田荘と重複が見られることから、船木田荘と横山荘は同一荘園の別称で、荘園領主側が船木田荘の名前を使用したのに対して、地元や幕府では横山荘が通用していたものと考えられる²⁰⁾。

一宮から六宮の位置は、武蔵七党などの武士団の分布に深く関わっていると思われる。一宮小野神社は横山党・西党、二宮小河神社は西党、三宮氷川神社は野与党・足立氏、四宮秩父神社は丹党・猪俣党、五宮金鑽神社は児玉党、六宮杉山神社は横山党など、それぞれの武士団の影響化にあったと推測される²¹⁾。

したがって中世の谷保郷・吉富郷・横河郷・小川郷・氷川郷・小曾木郷は、鎌倉時代において西党、横山党、秩父党の武士団を形成した土豪によって支配されていて、その鎮守として谷保天満宮、小野神社、元八王子八幡神社、二宮神社、下山八幡神社、虎柏神社を祭祀したと考えることができる。鎌倉幕府の御家人であった彼らは、多摩川流域の荘郷を支配するためにそれらの神社を祭祀する必要性があったのであり、それらの神社の規範となったのは鎌倉幕府が祭祀した鶴岡八幡宮本殿であったと考えることができる。そのことを傍証する事例として、建久2年(1192)鶴岡八幡宮本殿の造営が終わり、正遷座の際、古神体を源頼朝が家臣の梶原平三景時に賜ったことにより元八王子八幡神社が創立されたことをあげることができる。したがって中世初期において創立または再建されたこれらの神社本殿が三間社流造であったことは当然のことと理解されよう。

5. おわりに

旧多摩郡において現存する三間社をもつ神社を分析すると、百草八幡神社および雨武主神社を除く谷保天満宮、小野神社、元八王子八幡神社、二宮神社、下山八幡神社、虎柏神社は、鎌倉時代において西党・横山党・秩父党の武士団を形成した土豪が支配した領地の鎮守であり、彼ら土豪たちが本殿の創建または修理を行い、神社を祭祀していたと考えることができる。中世において、鎌倉幕府の御家人であった有力な土豪が祭祀した神社本殿が三間社流造であったと考えられ、その規模形式は鎌倉幕府が祭祀した鶴岡八幡宮の本殿形式の影響があったものと推測される^{注9)}。

また百草八幡神社は康平5年(1062)源頼義が再建した真慈悲寺の鎮守であり、雨武主神社は天正年間(1573-93)に北条氏直家臣石川土佐守によって創建された鎮守であることから小規模な三間社となったのであろう。

参考文献

- 1) 稲垣栄三(解説)：日本建築基礎資料集成2 社殿Ⅱ，p.4，1972年
- 2) 間宮士信他：新編武蔵風土記稿 多磨郡，1810～1828年
- 3) 拙稿：国立市指定有形文化財谷保天満宮本殿彩色調査報告書，2000年，国立市史 中巻，p.190-197，1989年
- 4) 特別展 武蔵国一之宮 多摩市ノ宮小野神社の変遷，2005年
- 5) 日野市史 通史編二(上)，p.88-99，1994年
- 6) 神社の由緒(八幡神社)，東京都の近世社寺建築，p.193，1989年
- 7) 拙稿：二宮神社本殿調査報告書，あきる野市教育委員会，2006年
- 8) 西多摩神社誌，p.199，1983年
- 9) 拙稿：青梅市指定有形文化財下山八幡神社本殿修復工事報告書，p.9，1986年
- 10) 青梅市の社寺建築，1988年
- 11) 國學院大學日本文化研究所編：神道事典，p.121，1994年
- 12) 菱沼勇：武蔵の古社，p.16-18，1972年
- 13) 国史大辞典7，p.246，1986年

- 14) 村上重良：国家神道，p.119，1970年
- 15) 多摩市史 通史編，p.548，1997年
- 16) 前掲参考文献15)，p.672
- 17) 前掲参考文献15)，p.552
- 18) 前掲参考文献15)，p.551
- 19) 前掲参考文献15)，p.548
- 20) 前掲参考文献15)，p.550
- 21) 前掲参考文献4)，p.17

注

- 注1) 虎柏神社本殿は、三間社切妻造である。
- 注2) 現在三間社の規模形式を伝える神社は、神社の保守性を考慮すれば、その形式を創建時から踏襲している可能性が高いと推測される。また参考文献9)によると、下山八幡神社本殿(三間社・流造、1755年)は、解体調査の結果、一部に古材が再用されていることが判明し、この形式は中世に遡る可能性がある。
- 注3) 地誌や社伝の示す由緒を全面的に信用するわけにはいかないが、地方史の研究成果を踏まえたものであれば、かなりの程度信憑性があるものと考ええる。
- 注4) 筆者は、式内社である阿伎留神社は、小川牧があった小川郷の鎮守であった二宮神社(小河神社)を想定している。この点については、新たな考察が必要である。
- 注5) 拙稿：建築(増補改訂 青梅市史 下巻，p.982-986，1995年，所収)において、中世郷村には在地領主が保護する郷社と檀那寺が存在していたことを指摘している。
- 注6) この地方における三間社流造という規模形式は、鶴岡八幡宮との関係において、祭神の内容(柱数)や建築形式の正当性などの視点からも考察する必要があると考えるが、この点については稿を改めて論ずるつもりである。

(2008年12月26日原稿受理，2009年8月3日採用決定)